

auじぶん銀行様で、 勘定系システム、 フロントシステムを同時更改

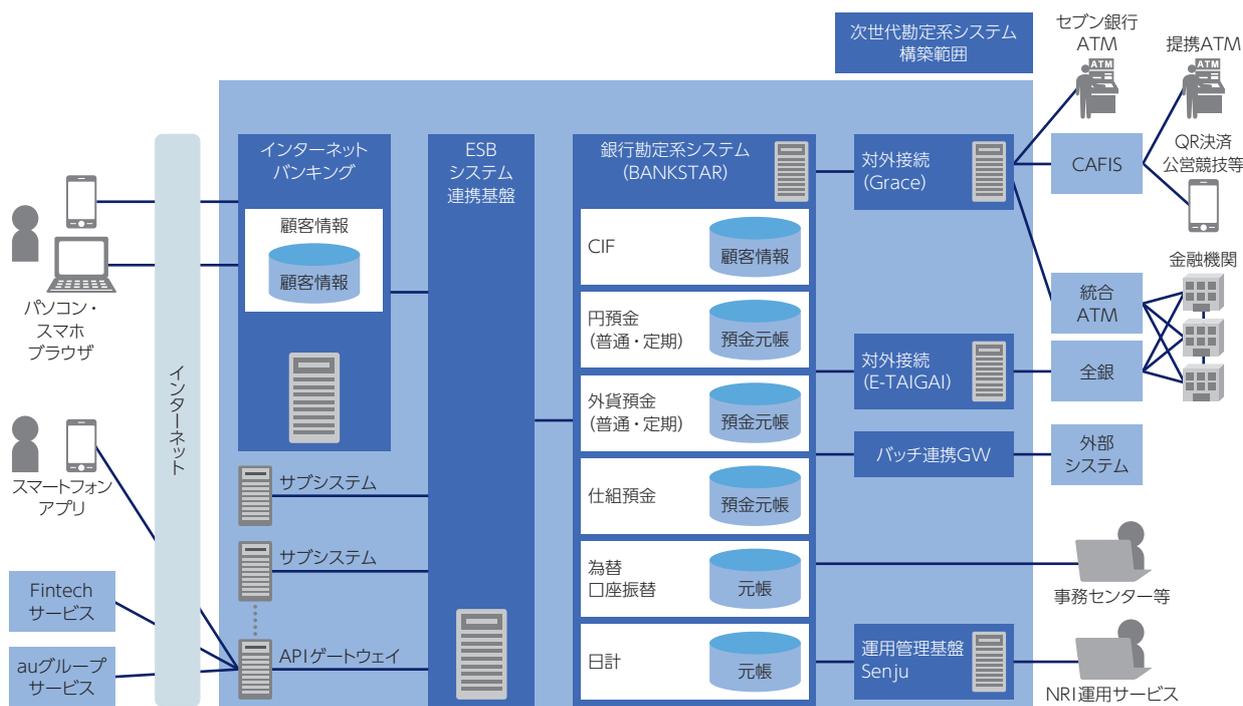
2021年5月、auじぶん銀行様（以下、auじぶん銀行（敬称略））において、次世代勘定系システムが稼働した。次世代勘定系システムを構成するのは、勘定系システム、インターネットバンキングシステム、ESB（Enterprise Service Bus）の3システムである。

勘定系システムには、日本ユニシスのオープン勘定系パッケージシステム「BANKSTAR*」を採用。野村総合研究所（以下、NRI）と日本ユニシスは銀行向けシステム事業で業務提携しており、BANKSTARの導入にあ

たっては、NRIがシステムのインテグレーション・アプリケーション開発を、日本ユニシスが基盤構築を担当している。

インターネットバンキングシステムは、NRIともう1社がマルチベンダーで新規開発を担当。勘定系システムと複数のシステム間の連携基盤となるESBをNRIが導入・開発することになった。これらシステムの稼働後の運用・保守もNRIが受託している。

auじぶん銀行 次世代勘定系システム：概要図



システム構成を抜本的に見直し

auじぶん銀行は、KDDIと三菱UFJ銀行により共同設立された銀行で、モバイルに特化した金融サービスを提供している。「銀行を連れて、生きていこう。」のブランドメッセージのもと、生活の一部ともなっているスマホの自由さ、便利さを銀行の機能においても実現することを標榜している。Banking Technology Awardsでは、2019年に最優秀モバイルサービス賞、2020年に最優秀AI活用賞、2021年に金融サービスにおけるエクスペリエンス提供部門の優秀賞を受賞。技術革新の早い分野において、スピード感をもってフレキシブルに対応してきたことが、お客様の体験価値への提供につながっていると高い評価につながっている。

auじぶん銀行では、さらに付加価値のある金融サービスを提供するには、開業以来利用していた勘定系システムを見直す必要があると考えていた。本プロジェクトの総指揮をとった執行役員 CTOの青柳賢一氏は、「今



青柳 賢一氏

まで使ってきた勘定系システムは勘定系システムとインターネットバンキングシステムが一体となったパッケージシステムでした。もちろん一体であることの利点もありますが、事業環境の目まぐるしい変化に対応していくためには、システムを特性に応じて分離、最適化する必要があると考えていました」と語る。

auじぶん銀行では、次世代勘定系システムのコンセ

プトとしてシステムの特性に応じSoEとSoRの二つの領域に分離することを目指した。SoEとは、System of Engagementの略の通り、顧客や取引先との結びつきを強化する目的で使われるシステムである。auじぶん銀行にとっては、顧客チャネルを担い、利便性が高く、質の高いサービスを実現するレイヤーであり、まさしく競争力の源泉を担うシステムである。SoRは、System of Recordの略が示す通り、記録することを目的としたシステムで、銀行業務の商品・サービス元帳、対外ネットワークとの接続の役割を担う。ビジネス上の変化は少ないものの、サービスの根幹をなす情報を集積する役割を担っており、停止時の影響は大きく、堅牢かつ信頼性が求められるシステムである。最終的にシステムの構成を、勘定系システム、インターネットバンキングシステムとシステム間の連携を担うESBの3層構造にすることを決めた。

勘定系システムに求めた要件

auじぶん銀行では、それぞれのシステムごとにベンダー選定を行った。SoRである勘定系システムのベンダー選定を担当したIT開発部 次長の綿引健太氏は、「勘



綿引 健太氏

定系システムは、開発コストの低減を図るため、パッケージシステムの活用を前提としました。安定した稼働が求められますから、国内の銀行が必要とする機能を

具備していること、国内金融機関での稼働実績があることを重視しました」と語る。勘定系システムとして「BANKSTAR」を選定したのは、綿引氏が示す基本条件に見合っていたこと、それに加え「BANKSTARはシステム仕様が可視化されていたことも大きなポイントでした。銀行側でシステム構成・方式・設計を理解しているか否かによって、IT戦略策定や案件の企画、障害対応の迅速性も変わってきます」と語る。さらに青柳氏は、「外資系パッケージシステムから新システムへの移行は本プロジェクトの最大のリスクと考えていました。NRIからの提案は、その移行に対するフィジビリティが高かったことも、選定理由として挙げられます」と続けた。

また、綿引氏は「BANKSTARの24時間365日無停止の機能の優位性も評価しました」と語る。一般的には、



事業継続等の対策のために、異なる地のデータセンターを活用し、片方に本番機、もう片方にバックアップ機を置く。ただしシステムメンテナンス時には本番機を止めることになるため、顧客サービスの中断も

発生する。しかし、BANKSTARは東京と大阪のデータセンターに置くシステムを、ともに本番機とし、それらを定期的に入れ替えるため、常に本番機が稼働しているため24時間365日のサービスを実現している。利用するNRIのデータセンターは、FISC安全対策基準を指針に設計・運営されており24時間365日完全ノンストップ対応に加え、ライフラインとしての電源、通信引込みについてすべて冗長化しているため、顧客利便性だけではなく、BCPという観点からも安心感につながる。

インターネットバンキングシステムは独自性を重視

インターネットバンキングシステムのベンダー選定にあたっては、青柳氏は「SoEは当行の戦略領域ですので、独自性を出す必要があります。パッケージの利用ではなく当行独自のシステムを新規開発することを前提としました。純粋に我々のニーズに即して提案いただいた先を選定しました。機能面だけではなく、開発スケジュール面、コスト面で優位であったのがNRIでした」と語る。さらに「今回、勘定系システムとインターネットバンキングシステムを分離しましたが、双方を総合的にマネジメントしていただける点にも優位性を強く感じ、NRIを選定しました」と続けた。

auじぶん銀行は、常に先進の技術研究と既存概念にとらわれない革新的な商品開発に取り組み、付加価値の創造に邁進している。インターネットバンキングシステムの開発にあたり特に意識したのは、①UI/UXの向上、②API化の推進である。画面デザインを刷新して操作性が際立ったサービス・インターフェースを提供するとともに、ネット完結が可能な諸手続きの充実により利便性の向上を図り、UI/UXの向上を実現した。またauじぶん銀行では、BaaSの拡大や、グループ企業へのサービス提供の充実を計画しており、そのためには勘定系システムが提供する業務の照会機能や取引機能のAPI化が必要となる。本プロジェクトでは内部的に勘定系システムAPI化を実現し、将来の外部公開に備える対応も実施している。

次世代勘定系システムが本格稼働

勘定系システムとインターネットバンキングの同時更改という大プロジェクトは予定通りに進み、無事2021年5月に本格稼働の日を迎えた。

青柳氏は「NRIはスケジュールを堅守してくれました。開発期間中は様々な課題、問題が発生しました。例えば、



コロナウイルス問題では、中国のオフショア開発拠点の閉鎖があり開発の遅延も発生しましたが、全体のスケジュールと体制を組みなおし、テスト開始までに遅延解消してくれました」と語る。

システム更改では、リリーステスト、本番リリースは顧客へ影響が出ないように大型連休を利用して行うことが一般的だ。従って、開発が1か月遅延しただけで、本番稼働は半年以上の遅延につながりかねない。青柳氏は、「プロジェクトの終盤に、大きな計画変更が生じたのですが、本番稼働の延期を回避するため、工程・タスクを細分化して段階的に品質確保する計画を共に導き出してくれました。また、客観的な視点を常に忘れずに、セオリーからはずれる場合には、どのようなリスクが当行に生じるかについても示してくれたことが、お互いの信頼につながり、一丸となって難局を乗り越えることができたと考えています」と語る。

今回の更改では、オペレーショナルリスクを排除するため、人手を介したオペレーションを一切不要とするシステム運用の完全自動化も実現している。その結果として、銀行側の手順書が7~8割も減ったという。また次世代勘定系システムの運用はNRIにアウトソースして、運用コストの低減も実現した。

エンドユーザーの反応も上々のようだ。綿引氏は「今まで慣れ親しんだデザインから大きく変更があったため、リリース直後は、戸惑われたお客様もいらっしゃいましたが、今ではシンプルな画面の使いやすさに高評価をいただくようになっています」と語る。また、機能面でも「インターネット上で完結できる手続きを増やせるよう機能を拡大しました。お客様からは手続きが楽になったという評価をいただいています」と続ける。新し

く刷新したことで、行内からも新たなアイデアが次々と誕生しているという。

NRIへの期待

青柳氏は「今回の次世代勘定系システムへの更改は、システムの全体像を理解する良い機会と考えています。当行もNRI側も本プロジェクトを通じて人財育成が図れたことも成果の一つと考えています」と語る。

auじぶん銀行では今回のプロジェクトは、あくまでも通過点と考えている。青柳氏は「次世代勘定系システムのリリースはあくまでも出発点です。今回開発したシステムを当行の事業成長に有効に活用していきたいと考えています。一例で言うとBaaS戦略です。柔軟に開発ができる環境ができましたので、NRIと一緒にこれからの未来を築いていけたら良いと思っています」と締めくくった。

NRIでは、顧客のニーズを最大限に実現させるには、NRIからも積極的に提案をしていくことが必要であると考える。今後もお客様とともに、未来に向けた魅力ある金融サービスの提供に尽力していきたい。

*BANKSTARは、日本ユニシス株式会社の登録商標です。

au じぶん銀行

Corporate Profile

auじぶん銀行は、2008年KDDI株式会社と株式会社三菱UFJ銀行が共同で設立。KDDIグループがもつデジタルマーケティングリソース、三菱UFJ銀行がもつ金融ビジネスに関する知見を事業基盤として、auフィナンシャルグループ各社との連携を深め、お客様の日常生活における決済・金融サービスをより身近にする「スマートマネー構想」を推進。スマホATM（スマートフォンがあればATMで入出金ができるサービス）の全国展開は邦銀初など、革新的サービスにチャレンジし続けている。2021年9月末時点の口座数は448万口座、預金残高は2.04兆円。